

「きのこの下には死体が眠る!?!」との出会い

山本 充弘

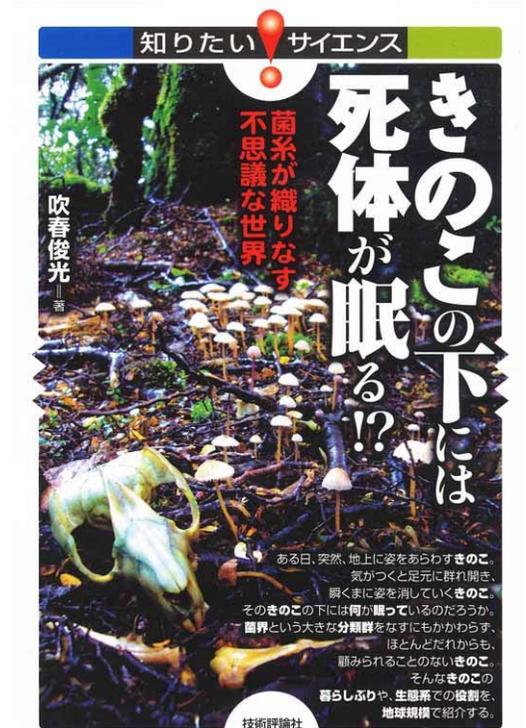
私たちにとって、本との出会いが人生の中で大きな意味を持つことはよくあることだ。私たちの進路を考えるきっかけとなったり、生きるということについて考える助けになったり、苦しいときに癒されたり、など。また、そこまで大げさなものでなくとも、楽しみを与えてくれたり、心に残るものを与えてもらった経験は誰にでもあるだろう。

読書から宇宙飛行士や考古学者に憧れた

最初に掲げた進路に関わる本について思い起こせば、小学校の高学年で図書館の宇宙をテーマにした空想科学小説に出会い、ありったけを図書館から借りてきて読み漁り、小学校の卒業文集に「将来は宇宙飛行士になる」と書いたことを思い出す（その2年後、人類は初めて人工衛星を軌道に乗れることに成功した）。また、バンビブック（朝日新聞が子供向けの科学読み物を定期的に出していた）でマヤ文明の絵文字が紹介され、文法が日本語に似ている可能性があるのも、この絵文字を解き明かすのは日本人になるかもしれないという文章を読み、将来は考古学者になってマヤの絵文字を解いてやろうなどとも考えた。本当に気の多い性格だ。

思い起こせばいろいろな本が私の人生に浮かび上がってくる

大学時代には工学部に籍を置いたが、実存主義文学に傾倒し、就職試験で試験官からどんな本が好きですかと質問され、実存主義文学と答えると、実存主義文学ってなんですか



「きのこの下には死体が眠る!?! 菌糸が織なす不思議な世界」

著者：吹春俊光，出版社：技術評論社，

2009年6月25日発行，四六判，232頁，

ISBN：978-4-7741-3873-2，1659円（税込）

と再質問されたことも思い出す。庄司光の岩波新書「恐るべき公害」は、私が公害問題に関わる講座を専攻し、環境問題を一生のライフワークにしようと考えたきっかけの書であり、ローマクラブの「成長の限界」は、22年間在職した千葉県庁の環境部から発展途上国

に対する国際協力の分野に転職する伏線となった本であった。思い起こせばいろいろな本が私の人生に浮かび上がってくる。そして、現状のたっぷりとある自由時間を楽しんでいる中で出会い、私を唸らせた本が吹春俊光氏の著した、「きのこの下には死体が眠る!?!」である。

同定できない！きのこに縁はなかったの？

3年前に長かった海外暮らしを終えて帰国し、第一線からおおた身を引いて、いろいろやりたかったことを体力が残っているうちにやるために自由時間をいっぱい作った。まずはデジタルカメラをぶら下げて樹木や鳥や蝶を追いかけることから始めた。山を登り、林に分け入り、上を向いて歩くために足を踏み外しそうになることも多かった。そして時々足元のキノコにも目がとまり、印象的なものをカメラに収めた。樹木は、葉や樹皮だけから種を同定するのに難を伴うこともあるが、逃げていかないので翌年の適当な時にその場所に行ければ花や実を観察できる。こうして高い山に登って撮ったものや旅行のついでに撮ったもの以外はほぼ同定が可能である。鳥や蝶は、カメラに収めること自体が難しいが、同定は図鑑やインターネットで95%以上可能である。ところが、ついでに撮ったキノコの写真を、図鑑を買ってきて調べてみたが、どういう訳かほとんど確信を持って同定できない。これはいったいどうしたことだろうか。まるで狐につままれたようだった。キノコには縁が無かったものとして一時はあきらめようとしたが、心にわだかまりが残った。

入会した千葉菌類談話会の先生の本がきのこ こ展会場の本屋さんにあった

同定できないには何か理由がありそうだ。ここはひとつ詳しい人に聞くしかないと考え、インターネットで同好会の検索を行ってみた。その結果、何と身近な所に「千葉菌類談話会」

というのがあるではないか。しかも県の中央博物館に事務局があるらしい。早速2009年7月に佐倉の城址公園でもたれた千葉菌類談話会の総会と観察会に参加して会員となった。その場で何冊かのキノコに関する本が紹介されたが、手にするところまでの気持ちは起きなかった。ただ、その中の一冊は死体という文言が入ったドキッとするような題名だったのが印象に残った（著者も紹介されたかもしれないが、そうなら聞き落してしまったのだろう）。後日、その時配られた絵葉書を頼りに銀座のINAXで開かれたキノコ展に行ってみた。INAXのビルは1階が本屋になっており、キノコ関係の本も多く置いてあった。そのうちの一冊は、例の死体という文字が入った本だった。それを手にとってよくよく見ると吹春俊光著となっていた。あれっ、これは千葉菌類談話会の先生ではないか。それなら読んどかないとまずいかな、という軽い気持ちで購入し、帰りの電車の中で読み始めた。

私にはまさに目からウロコが落ちる本

そこには驚くべきことが書かれていた。キノコを中心とする菌類が生態系でいかに重要な役割を果たしていることか。まず、キノコの仲間の担子菌類が単独で枯死した樹木の難分解物質であるリグニンを分解できる能力を有しているということ。仕事柄、水質汚濁防止にかかる廃水処理のうち、製紙工場からの廃水が微生物分解のできないリグニンを多く含んでおり、これへの対処が悩ましいものになっていることは身にしみている。次に、外生菌根菌の仲間が樹木と菌根共生し、それによってひどい乾燥や凍るような寒さなどの厳しい環境でも樹木が生存しやすくなっていること、キノコの予想される種の数に対して確定している種の数が圧倒的に少数なこと、などなど。発展途上国に対する環境分野の国際協力という業務上、大気汚染や水質汚濁（廃水処理に関わる微生物についてはそれなりに

勉強もした) 及び廃棄物という分野に限らず生物多様性の保全も重要なテーマである。この分野で最も重要な国の1つがコスタリカ(コスタリカ政府とアメリカの大手製薬会社の間で取り交わされた協定は、生物多様性条約の原型となった)であり、そこにも調査に行った経験がある。そのため、生物間の共生などもそれなりに知識を持っていたつもりであったが、菌類についてはまったく盲点となっていた。そんなこんなで、「きのこの下には死体が眠る!？」は私にとって正に目からウロコが落ちるような本であった。また、本の中で述べられている“どういうわけか胞子を飛ばすキノコから見て、北半球と南半球の間には空気の壁があるように見える”というくだりは、私を40年前の記憶に引き戻した。当時大学で大気汚染を専攻していた私にとって、大気拡散に大きく影響する気象学も必須の科目であった。そこで学んだ地球的(グローバルな)大気の流れについて、当時の本を引っ張り出して知識の再確認を行った。もともと、気象学、特に大気拡散理論はアメリカ、ヨーロッパ、日本など緯度の高い先進国の地域で発達した学問であり、赤道付近の情報は極端に少ない。しかし、大まかな情報によれば、大きな大気の流れは、地球の自転の影響で北半球も南半球も偏西風がふき、赤道付近は弱風帯で偏東風が吹いている。台風やハリケーンなどの暴風は赤道から少し極によったところで発生し、偏西風帯までは西に移動しながらそれぞれの極の方向に動いていく。正に北半球と南半球は、大気をグローバルにみると大きな壁によって仕切られているように見える。

読み返せばその都度新たな発見がある

「きのこの下には死体が眠る!？」の文章のうまさにも脱帽した。キノコに関わる豊富な経験が分かりやすい文章で紹介されている。もちろん専門性の高いものもこの本には含まれているので、書かれていることの全てを理

解する必要はない。しかし、この本を手にとった人の少なからずが、自分の経験や考えていたこととクロスする何らかのものを感じるに違いない。この本を読んだ後の2009年の後半は、私にとっては自由時間の多さを生かしたキノコ三昧の年となった。以前は木々の間を、上を向いて歩いてしたが、キノコを求めて歩くようになってからは、足もとばかり見て山道や木々の間を歩くことが多くなった。このため、足もとは確かになったが、上のほうが疎かになって枝に頭をぶつけることも度々起きるようになった。

前よりいくらかキノコが分かりだしたところで、11月に再度この本を読んでみた。その結果、一回目には見落としていたもの、あるいはイメージができなかったものや分からなかったものに対して、キノコの世界が少し広がった。吹春氏は、いつだったかキノコと3年間睨めっこをすれば大体の属が分かるようになるというようなことを言っていた。これから先もキノコを少しずつ知る度にこの本を読み返せば、その都度新しい発見がありそうに思えて楽しみだ。